
ブラインド・ラブ

大沢 綾子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラインド・ラブ

【Nコード】

N0960J

【作者名】

大沢 綾子

【あらすじ】

ある老舗の服飾メーカーに勤める神崎は、世話好きな会長の見合い攻撃にへきえきして、ついにゲイだと告白する。それがきっかけになって、神崎は会長の末息子係となり、海外にいる彼の手紙や絵の保管、誕生日やクリスマスプレゼントの手配をするようになっていくのだが……。

神崎隆俊は、ある老舗の服飾メーカーに勤めている。部署は、会長付の秘書室。二十七歳で海外渉外部からいきなりの異動だった。当初は右も左もわからなかった神崎も、もはや三十一歳になっている。中堅どころのやり手で、頭は相当にキレる男だ。

この会社での会長の秘書室というのはある意味人材育成部門で、やがてはここから経営に携わる人材が各部署に配属される。そういう点、出世が約束されているようなものだ。

が、すでに神崎はそれを諦めていた。

会長である葉室孝明は七十も半ばの、しかしまだ頭も感性も衰えを知らない元気な老人だった。若い者に交じっていても説教もせず、むしろその若々しい感受性と共感性は社の元気の源にもなっている。痩せて小柄できゅつと絞ったような面つきや、若い頃にはかなりのワンマンで強権的だったのも、今はむしろ慈愛に満ちた風貌となっていた。

神崎に言わせれば、会長の悪い癖はどうにも他人の世話を焼きたがるお節介さだった。とにかく、秘書室の連中はほとんど皆が会長の世話で妻帯している。その世話好きの嵐を去年神崎は、嫌というほど受けて悩まされた。そして、とうとう左遷覚悟で神崎は自分がゲイだと言い切ったのだ。

会長、私に女はいりません。ゲイですから。

げい、ってそりやどんなものだね、神崎君。

神崎は、ため息混じりに男色家だ、と言いなおしたものだ。

会長の返事は、ずいぶん遅れてやってきた。

ほほう……それはまた、珍しいな。女性はまったくダメなのかね。

ダメですね。

お稚児さんがいいのかね。

お稚児さん、と言われて神崎は企業のトップの前だというのに本気で目を怒らせていた。冗談ではない、自分は子供など視野をかすめもしない。お稚児趣味などありはしない。

そういう変態ではありません。

本気で抗議すると、あろうことが会長は乾いた明るい笑い声をあげていた。

怒るな、神崎君。私ぐらいの年齢では、義経か森蘭丸ぐらいしか想像できんだよ。

そういうやりとりがあつてから、すでに数ヶ月は経っている。その間、神崎はいつ自分に異動の辞令が下るのかを待っていた。が、会長の嫁を世話してやろうという攻撃がなくなっただけで、相変わらず第二秘書として秘書室にいる。

別に態度も変わらないし、会長は以前通りに接してくる。その事で、神崎は葉室孝明の事を以前にも増して尊敬し、好きになった。

そして現在神崎は、主として会長に渡す報告書作成に携わっている。今もパソコンに向かって、各部署から上がってくるデータの数字をまとめていた。バラバラのフォーマットと基礎数値の雑多さに悪戦苦闘している最中だ。

(いずれ、統一フォーマットを作成しなければ)

と頭の中にメモをする。そこへ、秘書室長の内線電話が鳴っていた。室長は、四十を少し越えている。そろそろ異動の時期かもしれない、と本人も秘書室の連中も思っているところだ。

二言三言 相手は、どのみち会長だろう、と神崎は踏んでいた。ちらり、と視線をやると室長と目が合う。

「神崎、会長がお呼びだぞ」

そう言われて、少し身構えた。まさか、とは思いが今頃になって左遷の大鉈を振り下ろすつもりか、と一瞬考えたのだ。

作業中のウィンドウを保存して閉じると、神崎は立ち上がった。た。

立つと、神崎の見事な体格がくつきりとする。身長は一八五を越

えている。首から肩へと続くラインは逞しく、手足の長さとその筋肉質な体型は派手に目を引く。学生時代の七年間をハンドボールで鍛えた神崎は、その体型を今でも崩さずに保っていた。面つきはいえ、これは下手をすると不遜と傲岸の極致のように鋭い。それを、神崎は沈深とした静けさで消している。

失礼します、と一礼をして会長の前に立つと、いつもは快活な表情の会長はひどく悩んでいる顔だった。神崎の嫌な予感がさらに増す。異動と言われれば、そこはサラリーマンの悲しさで頷くか辞めるしかない。が、神崎はこのトップを敬愛していて、出来るなら彼の下で働きたいのだ。

身構えている神崎の前で、会長はきれいな白髪を撫でつけてため息をつく。

「なあ、神崎君……君は以前、私に男色家だと言ったろう」

「……ええ、確かにそう申し上げました」

低く返事をしながら、神崎はいよいよか、と思う。

「どんなものなのかね。それは、その……医者とかで治らないのかね」

当時の神崎は、まだ血気盛んな青年だった。会長の言葉に、ひとを病気扱いする気かと本気で腹を立てるぐらいに、向こう見ずな所が残っていた。

「現代医学によれば、母親の胎内にいる時すでにそういう風に脳が出来るところです。医者にかかったところで、治りませんね」

つい、言葉遣いまでが微妙に喧嘩腰の響きを帯びる。それに気づいて会長がわずかに驚いた顔をし、勘違いをするな、と穏やかに言っていた。

「君の事を言ったのではない。私が言ったのは……末の息子の事だよ」

「末の……岳さんの下にまだ、会長にはご子息がいらっしやるんですか」

神崎は、驚いていた。いるのさ、と会長の厳しい皺が刻まれた顔

が、たとえようもなく穏やかでやさしくなつて神崎を見上げる。それは、神崎が初めて見る企業トップの父親の顔だった。現在は社長の席に就いている長男の場合も、常務席にいる二男の話をする時も見せた事がないほど、やさしい。

「私はずいぶんあれを甘やかして、好き勝手をさせておるんだが……」
そう呟いて、また、ため息をつく。

そして神崎は、自分がトップに噛みつきかかった事を思い出して慌てて頭を下げていた。早とちりもはなはだしい。背後で画策するような人物ではないと、そう思っていたはずなのに疑ったことを、正直に恥ずかしいと思つたのだ。

「申しわけございません！」

神崎の頭に、会長の乾いた笑い声が降ってくる。

「まあ、いいから頭を上げろ」

神崎が身体を起こすと、会長はデスクの上に広げたエアメールのうすい便せんを前に身を乗り出して神崎を見る。

「亨は……亨と言うんだが、それが手紙を送ってきてな。電話では言えないから手紙にしたと告白してきた中身は、君と同じだという事だった。それでつい、甘やかすすぎたせいでそうなったのかと、不安になつたのだよ」

だから、自分を呼んだのか　神崎は、会長の年齢のせいで瞳の色が薄くなつた目を、まともに見返す。

「ゲイだとおっしゃっているんですか」

「今は、そういうらしいな。読んでみるか？」

会長が数枚の便せんから一枚抜き出して神崎に寄越す。一瞬ためらつてから、神崎はそれをおし戴いた。

彼の字は、少し丸みを帯びた強弱のはっきりとした読みやすい字だった。書き慣れていて、一本いっぽんの線が安定している。

「拝見致します」

そして、神崎はその手紙の一部を読んだ。

『 父上、おとうさま、親父……ええい、もう、なんでもいいや。とにかく、そういう事だから。何がそういう事かかっていうと、もう俺のためにどこかの綺麗なお嬢さんを用意しないでいいから！ 』
「 っつ言おう、いっつ言おうと思つてそのまま日本をとんずらしちゃったけど、俺はね、俺は、その、男が好きなの！ ああ、言っちゃったよ。親父にはシヨックだろうけど、そういう事なの。女の子がフツーに男を好きになるみたいだね、俺はフツーに男が好きなの。ゲイつて言うんだけどさ。わかんないや、ええと……そうだ！ 俺を歌舞伎の女形みたいに思うといいよ。だって、俺はほんとにそうだから。」

「 だから、もうお見合いはいらさないから！ ね、相手に可哀想だからね。」

「 あ、でもでも、俺を、だからって女装趣味があるとかそういう風には思わないで。そっちは全然ないからね。黙つてりゃ、それは全然わからないから。だけど俺が女装したら、すごい美人になると思うよ。」

「 まあ、それはいいとしてね。」

「 そういう事で……シヨックだった？」

「 自分でも何とか出来ないかなあ、って思つてたんだよ。だけど、やっぱり俺は無理だから。」

「 でね、親父。できれば俺を勘当したりしないでよね。俺が親父の事を大事に思つているのは本当なんだから！」

「 まあその、わかつて、と言つのも無理なのかもしれないけど……でも、一応勘当する前にちゃんと送金してからにして！ マジで強盗に遭つて困つてるんだから。そこは、よろしくお願いします！ 』

その文面を読んでいる途中で神崎は、吹きだしそうになっていた。なんとまあ、あつけらかんと可愛らしい文章なのだろう、と思つたのだ。よほど父親に甘やかされたのか、文面いっぱいになんか出

ている。これほど深刻な話を、ここまでさらりと明るく告白するのは一種の才能だ。

しかし神崎は、必死になって笑いを押さえようとする。なんといつても会長の息子だ。軽く拳に握った手を口元にあてて、ピクピクひきつる頬を何とかしようとしていたら、会長から許可がでた。

「笑ってもいいぞ、神崎君。実は私も、笑ってしまったんだ」

もう 我慢が効かなかった。

神崎は思いつきり吹き出して目に涙を滲ませる。気がつけば、会長までが苦笑いをしていた。そうして神崎は、その亨という青年がどれほど会長に愛されているかに気づく。確かにその告白はショックではあつたらしい。しかし、撥ねつけるのではなく理解しようという努力がこの敬愛する上司に見えて、神崎は嬉しかった。

「今、お幾つでいらっしやいます」

その文面のあまりの可愛らしさに、神崎は訊いてみる。返ってきた答えは、ちよつと驚くようなものだ。

「二十四だ。おとし美大を卒業してから、家にはまったく居つかない子でな」

それは、若い と神崎は心の中で驚く。逆算すれば、会長が五十一歳の時の子供という事になり、会長が甘やかしたという事も納得できた。

おもむろに会長が、考え込みながら神崎に訊いてくる。

「なあ、神崎君……君は、そういう自分で生きづらくはないかね」
核心をついてくる問いに、神崎はしばらく黙る。その事に悩んだ十代、二十代の頃はたしかに辛かった。ことに十代の神崎は、そういう自分を嫌いでたまらなかつた事を思い出す。しかし、今はどうか。

「いいえ……会長。それはありません。生きづらくない世の中などない事を思えば、むしろ私は自分を受け入れている分樂です」

そうか、と会長は組んだ両手に顎をのせて呟く。

「亨は、どうだろうな……」

それは、神崎にはわからない。しかし、手紙の文面を読む限りでは彼が自分の性癖に悩んでいるとは、思えなかった。むしろ、羨ましいほどの自然体だ。

神崎がそう言うと、会長は皺ぶかい顔を綻ばせる。

「まあ、私はあの子がどうであれ、残念なのは孫の顔が見せて貰えそうにない事ぐらいだ。しかし、この先どうしてやればいいのかねえ」

神崎は、その言葉に答える。

「とりあえず、お金に困ってらっしゃるようですから、送金して差し上げればいかがでしょうか」

会長は、面食らった顔になってから、天井を突き抜けるような笑い声をあげていた。

それ以後、葉室亨という青年がらみの事はすべて神崎に任せられる事になった。葉室孝明もまた、その可愛がっている三男について神崎に話すことが楽しいらしい。幼い頃の出来事や、逸話について神崎にはよく話してくれるようになった。

ひとつには、ゲイである息子の事を話すのに神崎ならば気を使う必要がない、という事も大きかったに違いない。おかげで神崎は、まだ見たこともない青年についてずいぶん詳しくなっていた。

好きな食べ物、好きな色。

彼の性格や、容姿　残念ながら、彼の現在の写真は無い。自分の写真を撮るよりも、絵を送ってくるからだ。しかし、会長が手元に置いてある学生時代の写真から、神崎は彼を想像する自分を見つけていた。

社に宛てて送られてくる小包やエメールなどは、必ず神崎の手元に一度集められてから直接会長に手渡されるようになった。受け取った会長は、それを神崎の目の前で開ける。そして神崎は、手紙の一部を読み聞かせられたり、彼が描いたという絵を見せられたり

した。

葉室亨の手紙の素晴らしさは、まるで目の前で話してでもいるかのように自然体で、読んだ相手が会話をしているような気分になる事だった。そして彼の描く絵は、まるで子供のらくがきのように明るく、自由で制約がない。黄色のネコや、ゴツホ風の似顔絵や、ピククの浜辺。デッサンは完璧なのにデフォルメが効いて、面白かった。

彼の目には、世界はいつたいどんな風に見えるのだろうか。それが、神崎の最初の想いだった。そして、息子を自慢する会長の様子を見るにつけ、まだ会ったことのない青年に暖かい気持ちを抱いた。彼の消息が神崎のデスクに来る。表に捺されたスタンプから、今はどこそこの国にいるらしい、と想像するのがいつの間にか神崎の楽しみになっていた。

それらを大判のクリア・フォルダーにファイリングする事も、神崎の仕事になった。受け取った日付と投函された場所を記した見出しをつけ、画用紙や便箋が折れたりしないように気をつける。

まれに国際電話がかかるとそれは、必ずコレクト・コール。一度だけ、会長が不在で仕方なく直通電話の受話器を取り上げた事がある。耳に飛び込んできた声を、それからしばらくの間神崎は忘れる事が出来なかった。

ちようどいいトーンの甘すぎないやさしい声だった。話し方も、手紙の文面から受ける印象とは微妙に違って静かで親しみがある。

不在だ、と告げると残念そうなため息が神崎の耳をくすぐっていた。

「あと一時間ほどでお戻りになりますが、こちらから、おかけ致しますようか」

神崎が言つと、ううん、と子供のよくな返事が返って来る。

「いま、旅先だから……また、かけると伝えてくれますか」

「承りました」

その電話を切るのが、とても惜しかった。

そしてふと、思ったのだ。

あのため息を、自分の腕の中で聞いたら一体どんな気持ちがあるのだろう、と。それは一瞬神崎の脳裏をかすめただけの事だった。次の瞬間には忘れてしまい、いつものように仕事に没頭している神崎の姿があった。

しかし、声だけは　しばらく神崎の脳裏に残っていた。

神崎の仕事の中に、いつしか彼に贈るプレゼントやカード選びも含まれるようになっていた。一番最初は、クリスマス・カード。実際的には最も集中する時期の為、手配は二ヶ月も前から始めた。

「どうも、亨は私のセンスが気に入らんらしいからな」

会長の残念そうなもの言いからだ、彼から届く手紙はどうも簡単なお礼しか言っただけらしい。神崎は、過去に会長が贈ったものを書きとめて、自ら街まで出かけていた。これまでのように業者を呼んでも良かったが、カタログではなく実物を見て決めたかったのだ。

神崎には、度胸がある。

女性客が多いその手のショップに堂々とスーツ姿で乗り込むと、恥ずかしがりもせずカードを選んだ。神崎のその容貌と体格に、周囲の視線が集中しても意にも介さない。

そして　最終的に一枚のカードを手にしていった。

型押しの入った黒地の厚紙に、美しい雪の結晶が散りばめられて光の加減でキラキラと光る。中の文面には数種類あり、神崎は最もシンプルな「Merry X'mas!」と描かれたものを選んだ。余白に、父親からのメッセージが書き込めるようにという配慮だった。

喜んで貰えるだろうか　不安と期待のないまぜになった気持ちで、神崎はそれを送っていた。

その後も、神崎は彼のために相変わらず恐れ気もなくショップや

デパートに乗り込んだ。カップルの多い宝石店で、彼の26歳の誕生日のためにウィンドウを覗くのは、さすがに勇気がある。周囲はほとんどがカップルだったからだ。しかし、神崎は時間をかけて贈り物を選ぶ。

青いサテンとビロードが敷き詰められたガラスのケースを覗きこみ、ひとつひとつ店員に出させては吟味する。装飾品にしようと思っただのは、神崎ではなく会長の一言のためだった。

「なにか、こう一年中身につけていても良さそうなものを選んでくれ」

もうすぐ六月になる、といううっとおしい季節にそう言われて神崎は、アクセサリーに決めたのだ。それまでも、ちょっとした服や小物は贈っていたが、一年中身につけてという条件を満たすものではない。神崎はしばらく頭を悩ませて、アクセサリーを考えた。最初は、ゴールドかプラチナの認識票にメッセージを入れてもいいかと、思っていた。

男性だし、海外にいるから血液型や名前が入っていれば都合がよいと、実利的な面からのことだ。そのつもりで宝石店を巡り、何件目かで「それ」に出会った。

プラチナのスティック型のキホルダー。

ごつすぎず、かといって甘すぎもしないそのデザインと、小さな宝石が嵌め込まれた可愛らしさに惹かれた。ちょうど貴金属の価格が上昇し始めた頃で、通常よりも値が張るが、会長に確認をしてから、それを購入した。

リボンはブルーとシルバーにして貰い、包装紙も光沢のあるピンク・ゴールドを注文する。その小さな箱の入った紙袋を受け取った時、神崎は、自分でも気づかないうちに小さく微笑んでいた。

そして、運命の日。

それは神崎にとって、まさしく自分の運命が始まった日になった。

ようやく寒気が日本列島を抜けて、人々が春の足音を待ち望む頃に神崎の会社は経営陣のうち二人までをも喪う、という大事件に見舞われた。

葉室孝明と次男の乗った車が、高速道路で追突事故に遭ったのだ。その時、社用車を運転していたのは神崎ではなかった。死亡者は三名　会長と常務と、神崎の直属の上司である室長だった。

しかし、企業というものは何が起ころうと業務は続けねばならない。たとえトップに不幸があったところで、取引は待つてはくれないのだ。当然社内はしばらく愕然として全ての部署が一瞬動きを止めたが、すぐに日常に戻ろうと動き始める。その一方で、神崎たちは今後の対応と善後策、そして社葬の準備に走り回った。

その最中に、葉室亨がようやく帰国してきた。

彼を迎えに行け、と社長の葉室岬に命令された時　神崎は当然そうだろう、と自分が思っていたのを思い出す。そして、空港の到着ゲートで彼を待つているあいだ考えていた事は、どれほどショックを受けているだろう、という事だった。

ゲートから出てきた葉室亨は、想像していた以上にボロボロだった。一睡もしていないらしく目の下が黒ずんで、元から白い肌は蒼白。今にも倒れそうなほど、頼りなくか細く見えた。

それまでは写真でしか知らない葉室亨に、神崎は初めて会った。会って、こんな状況で会うのでなければ良かったのに、と心の底から残念に思う。

いつも笑顔の、それしか知らなかった神崎にとって彼のこの憔悴した様子は、敬愛し続けた会長の死よりもなお、衝撃だった。それを、支えてやりたい　と、神崎は奔流のように全身を駆け巡った熱い想いで見つめたのだ。

荷物を持ってやり、そつと二の腕をつかんで身体を寄り添わせる。細身の身体は今にも倒れそうで、足元がふらつき　そして神崎は、彼を抱いて自分の胸で泣かせてやりたい、と激しく思う自分に気づく。

自分の肩までしか届かない背と、茶色がかった柔らかそうな髪につつまれた白い顔は、ほんの少し日本人離れをした綺麗な顔だった。神崎から見れば、折れそうなほど華奢で頼りなさそうにも思える。そうして、泣く事も、眠る事も出来ない様子の彼は、限りなく孤独に見えた。

神崎が運転する車の後部シートで、彼は膝を抱えるように丸まっていた。額を押し当てている窓ガラスが吐息に曇って、白くなる。その様子で彼が生きている、とわかるほどひどく静かで、そして神崎にはかける言葉もないままだった。

それでも神崎は、バックミラーに映る彼にときどき視線を走らせながら、思った。

その悲しみを慰め、やわらげてやりたい。具体的には、自分の胸でそうしたやりたかった。そしてその気持ちが自分のどこから湧き上がるのかに気づいた時、神崎隆俊は葉室亨に恋をしていた自分を知った。

いつの間にか 目隠し鬼のように案内されながら、神崎がたどり着いた先には彼が存在している。直接には会った事もなく、会話を交わした事もないにも関わらずいつしか彼は、神崎にとって恋の相手になっていた。

（ああ……まさか、会長。そこまで狙っていたわけじゃ、ありませんよね）

彼を、葬儀の準備で忙しい邸宅に送り届けた後で神崎は、恨めしい気持ちで呟く。そうして、本当に迷惑千万なほど世話好きなんだから、と苦笑したのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0960j/>

ブラインド・ラブ

2010年10月8日15時02分発行